「愛顔（えがお）あふれる愛媛づくり」

平成２５年度「知事とみんなの愛顔（えがお）でトーク」知事講話

開催日時：25.5.24(金)
開催場所：吉海学習交流館

どうも皆さんこんにちは。今日はそれぞれの立場で皆さんお忙しい方ばかりだと思いますけど、このトークの会にお集まりいただきまして誠にありがとうございました。最初に３０分ばかりお話をさせていただきたいと思いますけれども、この仕事をいただいて県全体の地域を訪れる機会が続いているんですが、改めて愛媛県のあらゆる分野における魅力というものに、僕は松山の市長が長かったんですけども、同じ県内にいながらもほとんど知らないこともあったんだなということを知らしめられるような２年半の月日でございました。同じ県内にいても１つ市が変わるとやはり灯台下暗しじゃないですけども、なかなか知る機会はないのかも知れません。ましてやそのまちに住んでいても自分のまちの魅力というものにも気付かないこともよくあるのではないかと思います。例えば、松山市長の時に「坂の上の雲まちづくり」というのを行いました。これスタートの時に松山市民の皆さんも、なんでそんなんでまちづくりができるの、小説のまちづくりをしてどうなるの、ほとんどがそういう意見でありました。しかしながら県外では高い評価を受けているということを肌身で感じていましたので、それがやがて開花するであろうというふうなことを信じて走ってまいりました。すると、ある瞬間からその魅力に多くの方々が気付き始めて、こういうこともあるんじゃないか、ああいうこともあるんじゃないかと、その掘り下げの行動というのが市民のほうに広がっていきます。それがやがて形になり、最終的にはドラマになり全国へというふうなことに結実していったんですけども、住んでいるとその風景であるとか、食文化であるとか、あるいは伝統文化であるとか、こうしたものが毎日の日常の中で体感できますので、価値というものがなかなかわからなくなってしまう。しかしその価値というのは外の方から見てみると、とてつもない魅力を持っていることがあると思うんです。特にまちづくりというのはそれぞれの地域の歴史や伝統文化、そして自然、こうしたものこそがコンテンツの根幹にあるわけでありますから、そこに気付くということがまず何よりも大切ではないかと感じます。そしてもう一つは、そこに住んでいる方々が気付いた後に、受け止めてそれを磨いてつないでいく、こうしたことを通じて外に情報が発信された時に初めて、例えばその地域の産品が注目されるとか、あるいはその地域の観光資源が大変高い評価を受けるとか、こういうことに結果的にはつながっていく、そしてそれが地域の活性化になっていく。活性化をすれば雇用の場が発生し、税収が伸び、福祉や教育の充実へとつながっていく。すべての物事はつながっているんだろうというふうに思います。ここに一つのある会社があったとします。そこに所属する社員の皆さんが例えば「うちの会社の製品は大したことないよ」あるいは「うちの会社で発売しているサービスは他と比べると見劣りがするよ」とかいうふうな気持ちと、そして、日常の発言が続いたらその会社はどうなるか。まず間違いなくその会社は衰退の一途をたどっていきます。まちづくりも同じではないかなということを昔から感じていました。そのまちに住んでいるとよく、他人の庭は良く見えるじゃないですけど、この地域はいいよねというふうなこ

とを聞くことがあります。しかし、そうした会社で例えたのと同じように、そこの魅力というものを受け止められない住民の皆さんが多数を占めてしまったら、訪れる人に情報が発信されることもありませんし、何よりも空気というものが生まれてきません。ですからこの愛媛県の魅力というものを自分なりに消化をし、そしてそこに住んでいる方々と共有をして、そして地域の活性化につなげていくというのを自分の仕事の大きな柱の一つだなというのを最近つくづく思っています。今年の５月の連休、皆さんはどのようにお過ごしされたでしょうか。僕は徹底的に県内にこだわりました。ある時は南予、ある時は東予で、南予で今年は大洲のほうに行ってきたんですけど、同じ県内であります。大洲のどこへ行くかというと、肱川の清流を眺めながら臥龍山荘という本当にとてつもない魅力のある歴史的な建物を散策したり、そして冨士山という山に登るとそこにはつつじが満開であり、更にはそこから降りると昔５年くらい前にえひめ町並博というのがあった時に、地域の方々がまちづくりの一環として立ち上げた事業があって、ポコペン横丁というのがあるんですけどね、ここは昭和の空間になっていまして駄菓子屋さんだとかいろんなお店が軒先を並べているんですけども、タイムスリップしたような雰囲気の一角でありますが、そこにも大勢の人が集まっていました。その後また更に今度はぐるっと車で回って八幡浜のほうに向けて「みなっと」という新しい施設ができたのでそこを体感して、今度は双海で夕日を眺めながら食事をして帰ってくると、これが南予編であります。２日目は新居浜のほうに行ってまいりました。登山といえば西条市の石鎚山が西日本最高峰ということで、これはもう全国的にも知られていますけども、新居浜の西赤石山という 1,626ｍの山があります。そこに何で行ったかというと、一日で登山を通じて２つの楽しさを味わえるというふうなことを知ったからであります。新居浜というのはご存じのとおり住友発祥の地で銅山があったところでありますけども、この西赤石山に行くには新居浜から車で３０分くらいの登山道まで行きまして、そこから８００ｍくらいのところから 1,200ｍくらいのところまでは、まさに銅山の歴史を実感しながらハイキング気分で歩いて行けるコースになっています。すべての所に昔はこういうものがあったんだという写真と説明文が付いていますから、歩きながら、当時松山市が３万４千人、今治市が約１万人くらいですかね、宇和島が約１万人、別子山村が１万２千人と、それだけの人達が時代を築いた名残というものがハイキングの中で感じられました。そして後半は本格的な山登りということでございまして、十分日帰りで行ってこれて２つの体験ができる、こんなに身近なところでこれだけの体感ができるというのはそうそうないなということを感じました。そして３日目は実はここに来ました。家内と二人でサイクリングをしようということで、車に積もうと思ったらなかなか入らないんですね。一か八かタイヤを２つともはずしまして、全部はずすと小さくなりますから車に押し込められるということがわかりました。組み立てられるかどうかは現地に行ってからの勝負だということで糸山のところまで来まして、下の駐車場のところは無料でありますからあそこに車を停めて自転車を組み立てて、そこから大島、伯方島、大三島、二人でサイクリングをして、途中ここに寄ってバラのソフトクリームを食べて、そして大三島でオム焼きそばかなんかを食べて帰ってきたんですけども、これも本当に日帰りでこれだけの体感ができる地域は全国にそうはないと、改めてすばらしさを実感した次第であります。東予、中予、南予のそれぞれのコンテンツというのがあります。そのコンテンツ、特に来年は島を中心にその魅力をみんなで再確認をして発信しようと。何も新しいことをどんどんやるっていうわけではなくて。かつて松山市長時代に中島という

ところが合併しました。小さな島であります。島の人たちは合併当時、「もう中島はすんだ」と、絶望感のような空気が漂っていました。名前は消える、吸収はされる、衰退するだけだろうというふうなことで、何をやっても無理だなという感じの空気が漂っていたんです。週末になるとよく島に渡りました。この島にしかない魅力に何で気付かないんですか、やりましょうよと声をかけました。その時に多少荒療治ではありましたが、待っていてもまちづくりは動きません、でも皆さん本当にやる気になってくれたら１００％、いや１５０％一緒になって立ち上がってやりますよ。まずは何よりもまちづくりというのは主人公は住民の皆さんであって、皆さんがやる気になってくれるかが勝負なんです。行政が主導でやるなら、やらされているという空気から脱出することができません。でも住民の皆さんが立ち上がった時にはまちづくりというのは魂が入ります。よく市民参加、住民参加ということを聞きますけど、あれは本当の意味ではおかしいと思っていました。なぜならば住民参加、市民参加というのは行政が主体で呼びかけて市民の皆さん住民の皆さんが参加する、という考え方から生まれた言葉ではないかと思います。本来の主役は住民の皆さんでありますから、住民主体の行政参加というのが正しいのであって、そのあたりから話し合いをずっとした記憶がございます。やがて島の人たちがやってみようかという気になり、島活性化協議会というのになって、何も新しいことをやったわけではありません。この島では昔からこういう行事があったよ、この島では昔からこういうふうな習慣があるよ、この島ではこういうおいしいものが取れるよ、それをちょっと磨いてみようよ、そして磨いてくれたらつなぐ作業と情報発信は行政が徹底的にやりましょうと。そして受け入れる体制、今までにない人が来た時にどうおもてなすのか、それを島の皆さんで考えてもらって。そしてただ単に一過性のイベントで終わらせるわけにはいかないということで目標を立てました。できるだけ初めて島に来た人たちの、電話番号でもいい、メールアドレスでもいい、住所でもいい、そういう連絡方法を皆さんそれぞれが努力して掴んでほしい。それがこれからの最高の顧客リストになるんです。イベントを通じて集まった人のファンができたら、そこでアクセスの方法がゲットできたら、それが一番のお客さんになっていくという、これこそがイベントの本来の目的ではないかっていうような議論をしまして、島博というのが半年間にわたって当時の中島という小さな地域で行われました。その体験があるので、県の仕事をいただいた時に、こちらの今治地域の島しょ部にもまたそれとは違う規模の大きさもありますし、魅力もありますから、広島を巻き込んで大島博覧会というものを行うことによって瀬戸内の島の魅力、今治の魅力というものを多くの方々に味わっていただく機会にできないだろうかというふうなことがそもそもの発端でございます。前々から思っていたんです。このしまなみ海道というのは四国に架かっている３本の橋の中でたった一つ他の橋にないものを持っています。それは自転車の専用道があるということであります。これを活用しない手はない。もちろん今まで地域の皆さんもサイクリングや自然というものを使ったまち興しに取り組んでいらっしゃる方も多いと思うんですけども、しかしそれは情報発信して多くの人たちに伝播していかなかったら広がりはありませんから、うたい文句としては「世界に」というのをあえて付けさせていただきました。自転車で世界にということになると、どうしても情報発信のパワーが必要であります。そのパワーの相手として選んだのが、これはメーカーはどこでもいいんですけども世界最大の自転車メーカー、そことタイアップができたならば、その会社の世界のネットワークを無料で使ってしまなみ海道の情報が発信されていく、そういうルートを手に入れることができるのではないか

と、そんなふうに思ったわけであります。調べてみるとかつては日本は自転車の輸出国でありましたが、既に日本の自転車は輸出できるような状況ではなくなってしまっていました。現在日本で多く作っているメーカー、皆さんも知っているメーカーですけども、年間６０万台くらいの自転車を生産しています。世界一のメーカーは現在年間６００万台の自転車を生産しています。１０倍の規模の差ができてしまっていました。その会社どこにあるかって調べてみると台湾っていう国にあるな、何のつながりもないけどともかく行ってみようということで、一昨年１１月にその本社を訪れました。そしてそこで創業者の方とお会いして徹底的にしまなみ海道の魅力というものを伝えさせていただいたわけであります。するとですね、写真を駆使したプレゼンテーションをした結果、創業者のみなさんが、これはおもしろそうだ、非常にいいコンテンツだね、ということを直感されたんでしょうか、来年行くという結論を下してくれました。但し条件が、僕に対して「お前も一緒に走れ」ということだったので、サイクリングの道に足を踏み入れることになったんですけども、やはり世界一のメーカーはスピード感が全然違うなと感じました。１１月に出会って翌年の５月に来るという計画がその時決まったんですけども、行くからにはお土産を持っていこうと創業者の方が考えまして、そこで生まれたのが今治駅前にほとんどの構内を借り切って作られた「ジャイアントストア」という自転車のレンタルコーナーであったわけであります。出会って３か月であれだけのことを速やかに決断して出してしまうという、なるほど世界一のメーカーだけのことはあるなということをあの時痛感させていただいた思いがあります。そして５月に地元の皆さんにもご協力いただきまして、御一行が来て一緒に走りましたけども、来られたすべての皆さんが、「これは世界のサイクリングの聖地、パラダイスに成り得る」というふうな魅力を全身で感じとっていただいたような日々となったわけであります。なぜ、それはまずは自分なりの解釈でありますけども、何気なく渡る橋、でもすべての橋の形状が違いますよね。つり橋があったりアーチ橋があったり斜張橋もあったり、まさに橋梁の、人間の科学技術の粋というものをその景観を見ながら味わえるという橋の魅力もあります。そしてまた世界の中でも海峡をまたいで自転車で常時渡れるところはここしかないというオンリーワンというのもあります。海抜８０ｍから止まりながら海面を眺めたり無数に浮かぶまさに瀬戸内海の宝である島々の風景を眺めるという、これも大変な魅力であります。そしてここは造船のまちでありますから、そこで造られた船が世界に出ていく、そしてそれらの船が下を見ると行き交うのが見えるんですけども、あの船はどのあたりから来たんだろう、あの荷物を持ってインドネシアから来たんだろうか、中国からかな、そんな世界に思いを馳せられるような場所でもある。ありとあらゆるコンテンツが揃っています。そして自転車で走っていくと、今までの方々の取組みの名残でありますけども、魅力的な伊東豊雄さんのミュージアムがあったり、「岩田健 母と子のミュージアム」があったり、そういう施設が点在しているという魅力もあります。またここでしか味わえない潮流体験、これもすごいダイナミックな体験が待っているわけでありますけども、こんなにてんこ盛りの素材がこの島々にあるっていうことを訪れた世界の方々、自転車関係の方々が味わったわけであります。そして来年是非ともまさに世界のサイクリストに呼びかけるイベントということも住民の皆さんと一緒になって仕掛けて、その機会を通じて今治の名前を知ってもらう、しまなみの名前を大いに発信し、更なる輪が広がって地域が活性化するような仕掛けのイベントにつなげていくことができないかなということを心から思っている次第であります。この今治地域は観光面においてこれだけ

の素材がありますから、どう取組みをするかによって結果は全く違ってくるし、またこれだけの素材が揃っているということはそうはありませんから、大いなる伸びしろがあるということ、これだけは間違いないなというふうに思っています。また産業といえば、造船、海運、タオルでありますけども、かつてタオル産業というものは隆盛を極めましたけども、中国の安い人件費、安かろう悪かろう、そういう製品が世界を席巻してタオル産業というのは不況の淵に立たされてきました。しかしその中でも県の繊維産業技術センターと一緒になってともかくいいものにこだわって製品開発を進めていこうというふうなところで、我慢に我慢を重ねて乗り越えてきたのが今存在しているタオル会社の皆さんだと思います。やがてそれはブランド化され、今治タオルとして今非常に大きな販路の拡大につながっているところであります。昨年業界として、あるいは単体として東京の青山、それからスカイツリー、そしてグランドパレス東京という最高級ホテルに今治タオルのショップが一気に３店舗できました。すべてが計画の２倍くらいの売り上げをはじき出していますけども、先日青山の店に行ってきましたが、なるほどと思ったのが、若いお母さん方が殺到しています、どういう目的でというのを聞いてみますと、赤ちゃんを包むのは今治タオルなんです、自分にとって本当に可愛い宝物みたいな子供を包んで安心できるのは今治のタオルなんですということを買いに来られた若いお母さん方が言ってたのがとても印象的でありました。そこは棚があってタオルが触れるんですね。一つ一つのタオル、この触り心地がいい、いや私はこっちがいい、皆さんが触って選べるようになっていて、他のタオルと比べたら値段は高いんですけども、良さというものが浸透していますからファンが途絶えることはないということになりました。グランドパレス東京というホテルのタオルが全部今治タオルになっています。今から私も営業マンとして、今治のタオルを入れていないホテルは一流は名乗れない、こういう雰囲気を作れないかというふうに思っていまして、そこらじゅうのホテルに売り込みをかけていこうかなというふうにも思っています。これだけの不況を乗り越えてきて本当にいいものにこだわり続けた結果というものがこれからいい方向にどんどん出てくると信じていますし、それが今治の活性化にもつながっていくと確信しています。もう一つは造船関係でありますけども、今日この会場に来る前にバリシップの会場のほうに行ってまいりました。愛媛県の造船関係のブースは全部回ってきましたけども、なるほど本当に村上水軍の歴史から始まった造船業の深み、そしてそれぞれの会社が持ち味を持っているというところに非常に感心をいたしました。あるところは大型のタンカー船が得意、あるところは中型のケミカルタンカーが得意、あるところはバラ積みの内航船が得意、あるところはフェリーが得意、そういう特色をそれぞれの会社が持っているということを非常に心強く思いました。そして船を造る造船会社だけじゃなくて、その船に使われる様々な備品、例えば燃料を浄化する機械であったり、あるいは船用のエレベーターであったり、ハッチであったり、こうしたようなところも造船のまちならではのことだと思いますけども、同じようにその後世界につながっているという、そういう強さというものを実感させていただきました。更にはとどまることなく次なるテーマは環境と題して、CO_2をどれだけ削減できる船を造るか、あるいはエネルギー効率をどれだけ向上させる船が作れるのか、そのためには設計や船の形状の問題もあるでしょうし、あるいは操舵室がありますけどもあの形をどうすればいいのかとか、船に積むクレーンの場所をどこに設置すれば一番効率がいいのかとか、あるいは松山近辺には東レであるとか帝人という化学繊維の会社がありますので、その最先端の素材を使って軽くて丈夫で品質のいいもの、

例えばハッチに使えないかだとかいろいろな研究をしている、決してとどまらない。確かに韓国や中国の台頭があって昔と比べると厳しい状況でありますけれども、ちょうど先般シンガポールに行った時にこんな光景を見ました。シンガポールは現在世界有数の、上海とシンガポールが１、２位を争っていると思うんですけど、国際中継貨物基地であります。これは想像を絶する光景なんですけども、世界中から集まってきた船が沖合にずらっと並んでいます。シンガポールに集結してコンテナが降ろされています。でも自国でそのまま降ろされるものは５％しかありません。あとの９５％は詰め替えられるということになります。ですからひっきりなしに動いているんですね。システムがしっかりしていて港はほとんど無人であります。すべてコンピューター管理。世界から集まってきたタンカーは３０分で出て行かされると。着いたら３０分でオートメーションで荷物を降ろして３０分で出て行ってまた次の船が来るというのを２４時間ずっと。そして詰め替えの時にはトラックで移動していきますけども、荷物が正しいか正しくないかチェックするゲートもすべて無人であります。このゲートは２０秒を目標としていると聞きました。そのスピードが勝負だと、そのためにはどれだけの機械が管理できるのか、しかもペーパーレスでやれるのか、スピードを出せるのか、それを徹底的に追及してたどり着いたシステムですと言っていましたけども。そこでクレーンがありますね、荷物を降ろすクレーンが。初期の頃を見るとみんな日本製ですよ。でも中期の頃になるとみんな韓国製になっていました。最新式になるとみんな中国製なんです。日本のメーカーはダメなのかなと思いましたがそうではありませんでした。実は中国製はパッと見たらきれいに見えてよさそうなんだけど、まあ故障が多すぎる、品質が悪いんだと。だから日本製、韓国製に切り替え始めている、そんな声が国際的なビジネスの最先端の国から聞こえてきました。日本の強さというのは、特に今治の造船も、品質でありますから、そこがまた再び注目をされる時がそう遠くないと信じていますし、今日のバリシップの盛況ぶりを見てやはり船というものの裾野の広さ、それから可能性というものをつくづく味わった次第であります。その後全国の道の駅ではトップクラスに入る「さいさいきて屋」に行ってまいりましたけれども、なるほど人気の理由はこの中にあるなと感じたのは、徹底的に地元産にこだわっているということですね。平日の昼なんですけど一杯車が停まっていました。そこで売られているものは、スーパーみたいなところが恐らく８割から９割が愛媛産、ないしは今治産、肉も全部今治産、一部違うのもありましたけども。ともかく地域で取れたものを提供する、野菜もそうであります。そして特に東京でも今オーダーが入っているスイーツのコーナーですね。イチゴを使って、鎧塚さんという人が目を付けて東京で大々的に売り出しているそうでありますけども、そうしたこの地域の素材を使ったものにこだわることが消費者の心を掴んでいるという実態を見させていただいた次第であります。今食っていうことに関していえば、ＴＰＰの問題が浮上して外国産の農産物がどうなっていくのか、こういった大きな問題が出てきていますけども、一つ言えることは、例えばある国の農産物というのが本当に安全なのか否か、というのは我々しっかりと受け止めておく必要があるんではなかろうかと思います。農薬の問題もしかり、先日も農産物ではないんですが、その国のある都市から１００キロくらいのところに湖があります。その湖の近くの大学の関係者が愛媛県に来られました。目的は愛媛の大学の技術が是非ほしい。大学には環境関係の先生方がいて水質浄化の研究を一緒にやってほしいという依頼をされに来たということでありました。湖は魚がぼんぼん浮いているんです。工場の廃液で徹底的な水質の破壊を招いて、まともではないような

状況が常態化してしまっているそうであります。そんなことを考えているうちにニュースを見ていたら、どこだか忘れましたけど、その国で豚の死骸が１万頭川の上流から流れ着いたなんていうのが世界的なニュースになっていました。そういうふうなことが日常的に行われていて、その実態というのはほとんど伝えられていないという現実があります。そういうところで大量にものが作られていますから、今後はどちらかといえば、食ということに関していえば、安全であるのかどうなのか、新鮮でおいしいのかどうなのか。特に安全ということに関して、消費者の関心というのはＴＰＰ問題もあり一層高まっていくだろうと思いますので、今日のさいさいきて屋の取組みを見ても、どこに力点を置いていくのかというヒントがそこにはたくさんあるのではないかな、そんなふうにも思いました。以上ちょうど３０分経ちましたので、今日は皆さんそれぞれの分野からお集まりだと聞いていますので、忌憚のない意見交換ができたらなというふうに思います。限られた時間でありますけどもよろしくお願い申し上げましてご挨拶とさせていただきます。